

平成 25 年度 私立学校初任者研修 近畿地区研修会 実施報告

平成 25 年度私立学校初任者研修近畿地区研修会は、8 月 19 日(月)・20 日(火)の 1 泊 2 日の日程で近畿 2 府 4 県から 98 名の初任者教員が参加して、大阪ガーデンパレスで開催された。

初日は 10 時から開会式が行われ、まず日本私学教育研究所山路進主任研究員が主催者として挨拶し、続いて近畿私立中学高等学校連合会の山本綱義会長、近畿地区初任者研修運営委員長の木村良己氏より挨拶があった。

開会式終了後、まず「青少年の安心・安全なスマートフォン利用」と題して一般財団法人マルチメディア振興センターの宇津木麻也子氏が講演を行った。いまや急速に発達してきたネット世界に、教育現場も新たな対応を迫られている。講演では、現在の生徒たちがネット社会の中に生まれた“デジタル・ネイティブ世代”であることから、インターネットの危険性に対応した学校・家庭のルールづくりの必要性やフィルタリングの有効性について紹介があった。こうした問題は、参加者も日頃から頭を悩ませているだけに、この講演から多くの示唆を得たものと思われる。



昼食後、奈良学園理事・聖ウルスラ学院理事長・松徳学院理事長の梶田叡一氏が「我が国の中等教育の現状と私学の課題」と題して講演を行った。講演では、教員としての一般的な心構えが語られただけでなく、“小回りがきく”私学の特性を生かし、生徒一人一人を上手に伸ばし“おお化けさせる”教育を目指すことが参加者に求められた。

その後休憩をはさみ、2 つの体験発表が行われた。まず京都橘高等学校の米澤一成教諭が「サッカー部創部から 12 年間で学んだもの」と題し、同校への赴任から 2013 年全国高校サッカー選手権で準優勝に輝くまでの歩みを語った。米澤教諭は、創部時から“全校応援・全国制覇”を目標に掲げ、その実現のためには指導者自身が部活動だけでなく授業、学級経営、その他の校務に妥協することなく向かうことが大切であることを強調した。また日本代表チームに選ばれている選手の多くが、クラブチームではなく学校の部活動育ちであることを指摘し、中学・高校時代の教育の大切さを説いた。2 つ目の発表は、比叡山高等学校の女子ソフトボール部を指導し全国大会に導いた奥村淳二教諭であった。奥村教諭は、「私学を取り巻く環境の変化～生徒指導の観点から～」と題し、まず最近 20 年間の教育環境の変化をあげたのち、“昭和の問題行動”は本人が“悪いとわかってやっている”のに対して“平成の問題行動”が“悪いことに気づかず行われている”ことを指摘し、生徒指導における初期対

応と生徒一人一人へのきめ細かな対応が重要であることを力説した。



16時から6つのグループに分かれて、各2名の指導助言者のもとで分散会が行われた。この分散会は2日目午前中まで継続して行なわれた。

2日間のグループ討議は、まず一人一人が自己紹介や日ごろの教育活動上の悩みや課題などについて発表することから始まり、進行役を中心に次第にテーマをしばりながら活発な意見交換が進められた。初日の夕食を兼ねた経験交流会がグループごとのテーブル配置だったことも、参加者の距離をさらに縮める役割を果たし、2日目の討議を充実させることにつながった。



2日目は、8時30分からグループ討議を再開し、昼食後の全体会で代表者が各グループ10分ずつの報告を行った。どのグループでも、学習指導や生徒指導の場面における生徒に対する適切な“距離やタイミング”について意見が交わされ、また発達障害やネット・トラブルなどの昨今の問題が取り上げられたことも報告された。あわせて各グループの代表者からは、この研修会から多くを学び、実りある研修会であったとの感謝のことばがあった。

研修会最後は、同志社大学心理学部鈴木直人教授の「私学で教えるとは」と題する講演で締めくくった。鈴木教授は、現在の子供たちが置かれている状況や彼らが求められている事柄を整理しながら、私立学校は「志立学校」(志をもつ学校、志によって立つ学校)であると述べ、各校が建学の精神に立ち返り、生徒の10年後、20年後を見据えた教育をすることこそ私学の使命であると力説し、参加者に私学教員としての自覚と研鑽を求めるとともにその将来に向けてエールを送った。

その後参加者は研修のまとめとなるレポートを作成し、閉会式を迎えた。閉会式ではまず当研究所山路進主任研究員が研修会を総括する挨拶を行い、続いて参加者代表に木村良己運営委員長から終了証が渡され、2日間の研修会を無事終了した。なお次年度の研修会は、8月18日(月)・19日(火)に今年度と同様に大阪ガーデンパレスで開催される。